

30275 ✓

教科書文庫

3
810
32-1901
2000301401

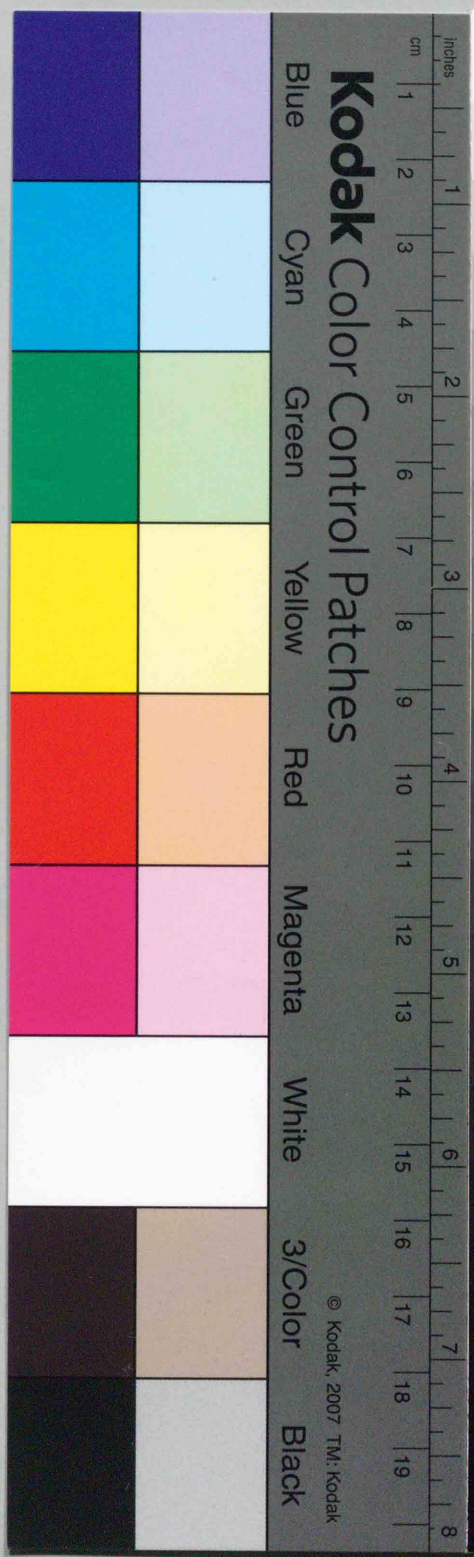
Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



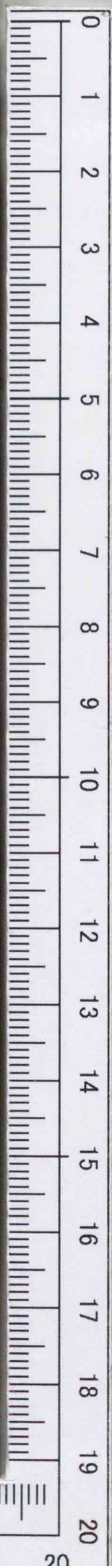
© Kodak 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches



Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak 2007 TM: Kodak



375.9  
N19  
資料室

高等小學  
國語讀本  
三



3759  
N119

明治三十四年九月三十日 文部省檢定  
高等小學國語教科用童兒

高等小學國語讀本三

目次

第一課	國體	五
第二課	故鄉	七
第三課	櫻	十一
第四課	吉野山	十三
第五課	霞	十六
第六課	栽樹	十八

高等小學國語讀本三



高等小學國語讀本

伯爵 副島種臣  
東久世通禧  
西澤之助  
編閱

國光社藏版

隆藏



第七課	古橋輝兒	二十一
第八課	朝鮮國	二十五
第九課	支那	三十
第十課	滋賀の都	三十三
第十一課	衣服	三十六
第十二課	染料	四十
第十三課	池野大雅	四十二
第十四課	讀書のたのしみ	四十八

第十五課	衛生	五十二
第十六課	温泉	五十五
第十七課	交通	五十七
第十八課	商人の心得	六十
第十九課	信用	六十四
第二十課	爲替ノ法	六十六
第二十一課	衣笠城趾	六十九
第二十二課	元寇(二)	七十五

高等小學國語讀本三

高等小學國語讀本三

第二十三課 元寇(三)

七十五

第二十四課 日本刀

八十

第二十五課 みくじのまもり 八十三



高等小學國語讀本三

伯爵 東久世通禧 閱

伯爵 副嶋種臣 閱

西澤之助 編

第一課 國體

我が皇室は、天祖の御正統を受けさせ  
給ひて、連綿として、とこしへに、四海に君臨  
し給ひ、我等臣民は、皇室を幹として、枝を

高等小學國語讀本三

分ち、祖先以來、協同して、大宗家とまします  
皇室に奉事し來れり。

此の如く、君臣の分は、開闢の初より定りて、  
天地の處をかへざるが如し。而して、其のし  
たしむは、猶、父子のごとく、皇室は、永く、臣  
民の大父母とまし、く、て、限なき御惠をた  
れさせたまひ、同胞一體の臣民は、常に、忠孝  
をはげみて、他心あることをなし。

かゝる美しき國體は、世界中、他に、比類あら  
ざるなり。

第二課 故郷

吾は、數年前に、故郷を出で、歐洲に遊學し、  
北米合衆國を経て、今歸り來れり。

船は、サンフランシスコ桑港を出で、はてもなき大洋を、西へ  
西へと進むに、陸地は、影だにも見えず。眼に  
入るものは、只、波より出で、波に入る日と

月とのみなりき。  
 二週日の後、水煙の  
 間に、雲の如きもの  
 現れたり。ひとみを  
 定めて、よく見れば、是、わ  
 が富士山なり。此の時のう  
 れしさ、譬ふべき物もなか  
 りき。



船の進むに随ひて、蒼々たる、安房、上総の山  
 も、まぢかく見ゆ。はげ山をのみ見な  
 れたる眼には、まことにめづらし。  
 こなたかなたの燈臺の、光を  
 放ちて、波間を照す頃、船、横濱  
 に着きて、久しく慕はしかり  
 し、わが日本の土地をふむを  
 得たり。

翌日、汽車に乗りて、故郷に歸る。弟妹は、門に迎へ、父母は、つゝおなきを喜び給へり。親族、故舊は、かはるゝぐ訪ひ來て、種々の物語、終日盡きず。

吾が遊びし山川も、昔にかはらず。氏神の森、城山の櫻など、益茂りて、翠深し。學校は、建築改りて、宏大となり、吾が師も、壯健にて、今も、生徒を教へ導き給ひ、朋友は、いづれも、家業

に勉勵せり。

世界廣けれども、おのが故郷より、樂しきはなし。今よりは、益、家業を勵み、故郷の爲に、力を盡して、その繁榮を圖るべし。

### 第三課 櫻

櫻は、山櫻の花しげく咲きたるに、赤くして、細き葉のまばらに交りたるは、比ぶべき物もなく、美し。葉青くして、花のまばらなるは、

いたく劣れり。

大方、山櫻といふ中にも、種々あり。細に見れば、木毎に、變れる所ありて、全く同じきはなき様なり。

又、今の世に、八重、一重などいふも、様變りて、まことにめでたし。

すべて、曇れる日の空に見あげたる花は、色鮮ならず。松などの、青く繁りたる此方に咲ける花は、色殊にはえて見ゆ。空、清く晴れたる日、日影のさす方より見たる花は、美しさ並ぶものなくして、同じ花ともおもはれざる程なり。

(本居宣長の文による)

第四課 吉野山

吉野山ハ、大和ノ吉野郡ニアリ。山中、櫻樹多ク、花盛ノ頃ニハ、恰、白雲ノ掩ヘルガ如シ。中ニモ、ヒトメ一目千本、センボン奥ノ千本、センボンナドノ眺望ハ、實ニ、



人ノ目ヲ驚カシム。

吉野山かすみの奥は知らねども

見ゆるかぎりは櫻なりけり

ト、古人ノ詠ミシハ、ヨク、ソノ様ヲ述ベタリ

トイフベシ。

コノ山ハ、古ヨリ、代々ノ 天皇、シバく行

幸セサセ給ヒ、殊ニ、南朝、三代、五十餘年ノ間、

行在所ノアリシ處ナリ。



サレバ、コ、ニ遊ブ

モノ、吉水院、如意輪

堂ナドノ古蹟ヲタ

ヅネ、昔ヲシノビテ、

袖ヲヌラサマルハ

ナシ。

嘗、皇后陛下行啓

セサセ給ヒテ、

村雨の晴れたるけふもふりし世の

みやおたづねて袖ぬらしけり

トヨマセ給へり。

第五課 霞

霞ハ、水蒸氣ノ、淡ク凝リタルナリ。ソノ、日光ヲ受ケテ、ウルハシクタナビケルサマハ、筆紙ニ盡スベカラズ。

春ノ朝、トク起キ出デ、眺ムレバ、四方ノ山

山ノ、ウチ霞ミタルハ、薄ギヌヲ引キ渡シタルガ如シ。

又、野山ノ、日ノ入リアヒニ、薄ク、濃ク色ドラレ、或ハ、月ノ光ノ、オボロニ見ユルナド、何トナクノドカナリ。

霞ハ、大陸ニテハ、多ク見ルコト能ハザレドモ、我が國ハ、四方、海ニテ、水蒸氣ニ富メルガ故ニ、カク美シクアラハレテ、面白キ春ノ景

色ニ、一キハ、趣ヲソフルナリ。

文法 動詞ハ、語尾又ハ、全体ヲ變化ス。例ヘバ、凝

リトイフ動詞ノ、凝ラ、凝リ、凝ル、凝レトナ

リ、得トイフ動詞ノ、え、う、うる、うれトナル

ガ如シ。之ヲ、活用トイフ。

第六課 栽樹

四方の山々に、霞がたなびいて、春景色になり  
りました頃から、父上と兄上とは、田畑を耕  
すいとまに、種々の苗木を植ゑつけておら  
れます。

五六年前に植ゑられた桑は、もう、十分に成  
長して、母上と姉上とが、蠶を養はれるのに、  
不足のない程になりました。

あすこの山には、おちい様が、丹精してうるゑ  
ておかれた松や杉が生ひ茂って、いつも、青  
青としておます。この林は、父上が培養せ  
られたので、ふだんの薪に、不自由がござい

ません。

家のまはりにある、數十本の桐は、私の教育費にとて植ゑられたもので、はち十二年たつておます。此の外、春は、梅、桃、櫻などが咲きつゝ、秋は、梨、葡萄、柿、密柑などがよく實つて、いつも、たのしみがつきません。

古語に、「二年の計は、穀を植うるにあり。十年の計は、樹を栽うるにあり。百年の計は、徳を樹うるにあり」といふことがございます。すべて、人は、後々の爲を思つて、永遠の計をするが、肝要でございます。

第七課 古橋輝見

古橋輝見は、三河の人なり。幼時、家産衰へたりしかば、之を回復せんとして、日夜勤勉したりき。

長ずるに及びて、山林の業に志し、家産未豊

ならずるに、自、金を出して、杉、檜、等の苗を買ひ、全村にわかれて栽ゑしめけり。人々、厭ひて、苗木を焼き拂はんとするものさへありしを、輝兒、誠意を以て、栽培すべきことを、懇に説き諭し、かば、今は、數萬本の大木、一村の共有地に立ち並び、人、皆、輝兒の徳を仰がぬはなきに至れり。

輝兒、かつて、縣廳に奉職せし時、俸給を以て、茶の實、桑苗を買ひて、村民に與へ、貧しきものには、費用を與へて栽ゑつけしめしかば、數年にして、此の地方に、製茶、養蠶の業、盛に起れり。

又、農談會を設けて、耕作のことをすゝめ、學校を興して、子弟を教へ、財を出して、貧者を惠みしなど、善行、甚多し。常に、儉約を守り、わが身に奉ずること薄かりしかども、公益の



爲には、すこしも、吝むことなく、何事も、自先  
んじて、人を導きし  
かば、感化せられざ  
る者なかりき。  
性、至孝にして、嘗、父  
の病みし時には、寢  
食を忘れて看護し、  
氏神の社に詣で、

全快を祈りけり。かくて、幸に、病癒えしかば、  
神恩を忘れじとして、毎夕、社に、燈火を獻ずる  
こと、身を終ふるまで怠らざりき。  
又、尊皇の志深く、或年、畝傍山ウネヒヤマの御陵を拜せ  
しときの如きは、人、その敬禮の厚きに感激  
したりきとぞ。

第八課 朝鮮國

亞細亞ノ大陸ハ、沿岸ノ諸山、概、禿山ニシテ、

樹木少ク、我が國ニ比スレバ、頗荒涼タリ。近ク、朝鮮ノ如キモ然リ。

朝鮮ハ、對馬海峽ヲ隔テ、我が九州ニ隣リ、東ニ、日本海、西ニ、黃海ヲ控ヘ、北ハ、豆滿江ニテ、露國ノ西比利亞ト界シ、又、鴨綠江ヲ隔テ、支那ノ滿洲ト接ス。大サ、我が國ノ半ニアタリ、人口、一千萬ニ餘レリ。氣候ハ、寒暑共ニ甚シク、土地肥沃ニシテ、大豆、米穀、人參、牛皮等ヲ産ス。

國內ヲ、八道ニ分テリ。其ノ西部ト南部トハ、田野連リテ、河流ニ富ミ、東部ヨリ、北部ニワタリテハ、山岳多シ。然レドモ、樹木ハ、人民ノ伐採ニ任セテ、植エツクルコトナケレバ、概禿山ナリ。

此ノ國ノ首府ヲ、京城ト云フ。我が公使館ノアル處ナリ。漢江ニ沿ヒテ、西ニ下レバ、仁川

港アリ。我が居留民、頗多ク、釜山、元山等ト共ニ、外國貿易ノ要港タリ。

漢城ノ南、十數里ニ、成歡セイクワン、及、牙山アリ。牙山ノ海岸ヨリ、北ノ方仁川ニ到ル海中ニ、豊嶋アリ。共ニ、日清戦争ニヨリテ、名ヲ知ラレタリ。漢城ヨリ、遠ク、北ニ進メバ、大同江ノ岸ニ、平壤アリ。亦、日清兩軍ノ激戦セシ地ナリ。

此ノ國、古ハ、高麗コマ、百濟ペク、新羅シラ等ニ分レタリシ

ニ、後、合シテ、一國トナリ、五百年前ニ、今ノ王家李氏、其ノ主トナリテ、朝鮮トイヒ、近頃、改メテ、韓ト號セリ。

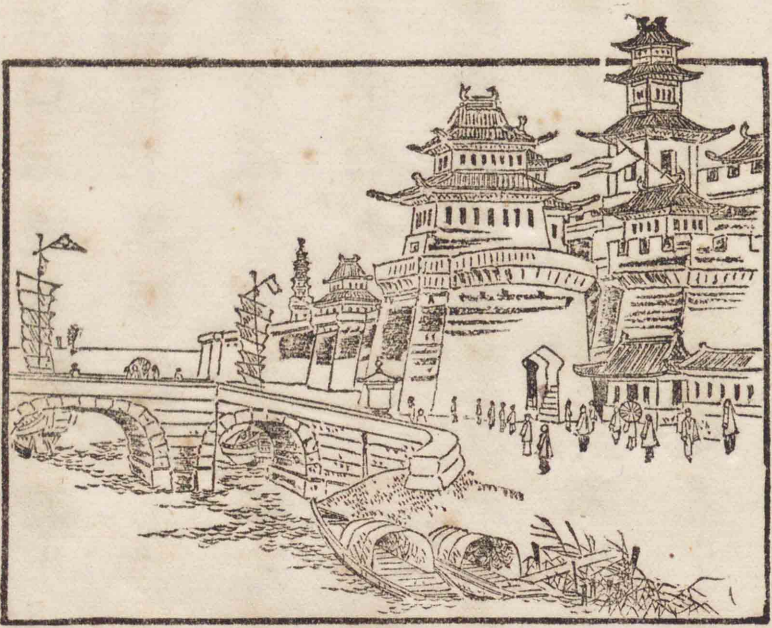
神功皇后御親征ノ後ハ、久シク、我ニ來貢セシニ、屢變革カクアリテ、支那ノ屬國ノ如キスカタトナリキ。其ノ後、豊臣秀吉之ヲ征服セントシテ果サズ。近年、我が國ノ助ニヨリテ、獨立國トナルニ至レリ。



第九課 支那

支那ハ、今、清ト稱ス。朝鮮ノ西ニ隣レル大國ニテ、大サ、殆、歐羅巴全洲ト等シ。人口、凡四億アリ。東南ハ、海ニ面シ、西北ハ、山脉ヲ以テ、露國ノ西比利亞ニ接シ、西南ハ、印度、緬甸、及安南等ニ續ケリ。

北部ハ、氣候寒冷ニシテ、冬日、河水氷結シ、舟通ゼズ。南部ハ、炎熱ニシテ、年中、雪ヲ見ルコトナシ。沿海ノ地ト、黃河、楊子江ノ流域トハ、



四時暖ニシテ、地味肥エ、都邑、村落、相連リ、緑綿、砂糖、茶、生絲、米穀、陶器、漆器、絹布、紙、烟草等ノ産物多シ。  
上海ハ、支那第一ノ貿易場ニシテ、楊子江ノ

江口ニ近キ處ニアリ。江ヲサカノボレバ、南<sup>ナ</sup>京<sup>キン</sup>トイフ都會アリ。

三十二

南京ハ、名高キ舊都ニシテ、支那ノ文學、技藝ノ中心ナリ。

南方海岸ニ、廣<sup>カン</sup>東<sup>トン</sup>アリ。古ヨリノ貿易地ナリ。ソノ近傍ニ、香<sup>カン</sup>港<sup>ゴン</sup>アリ。英國ノ所領ニシテ、東洋艦隊ノ根據地タリ。東洋、西洋ノ間ヲ往來スル船舶、多クハ、コ、ニ寄港ス。

黃海ヨリ、威海衛、旅順口ノ間ヲ過ギ、天津ヲ經バ、北<sup>ペ</sup>京<sup>キン</sup>ニ到ラン。

北京ハ、清國ノ首府ニシテ、其ノ周圍ニ、大ナル城郭ヲ築ケリ。人口、甚多クシテ、市街雜沓セリ。

コノ國ハ、早クヨリ開ケテ、古來、我が國トモ、盛ニ交通セリ。

第十課 滋賀の都

三十三

近江の滋賀は、一千二百四十年ばかりの昔、  
 天智天皇の都し給ひし地なり。其の蹟、今の  
 大津の北方にありといふ。この頃には、我が  
 國勢盛にして、支那、朝鮮との交通もしげか  
 りき。

天皇、大に、制度をあらためたまひて、舊來の  
 弊習をもものぞきたまへり。又、深く、學問を好  
 ませ給ひ、はじめて、學校を設けさせ給ひき。

後、京都、および、諸國に、多くの學校起りて、ま  
 すます、文教の開けたりしは、全く、此にもと  
 づきしなり。

當時、農耕の業、なほ、よく開けず、諸國に、原野  
 多かりしかば、天皇は、民を勵して、田圃を  
 開かしめ給ひ、工業をも獎め給ひて、みづづ  
 から、水時計を工夫したまひき。

されば、高貴の人の妻女も、自、衣服を染め、或

は、春の野に出で、若菜摘むなど、風俗最淳  
樸なりき。

文法 好むトイフ動詞ハ、好ま、好み、好む、好めト

活用ス。カク、五十音圖ノ、上ヨリ四段ノ音

ニ活用スルヲ、四段活ノ動詞トイフ。

第十一課 衣服

身の健康を保たんには、四時、衣服に注意し  
て、體温を、適度にせんこと、肝要なり。

衣服は、原料によりて、用を異にす。麻、<sup>カラムシ</sup>苧にて

織りたるものは、熱を散すること速きがゆ

ゑに、盛夏の候に用ぬ、木綿、毛織等は、能く、體

温を保つものなれば、冬の肌着、又は、外套の

料とするに適せり。

衣服は、禮儀を修むるに、必要なるものなれ

ば、仕立方、取扱方等に注意し、着様をも正し

くすべし。

さて、上代には、服制も、甚簡易なりしに、滋賀

の都の頃より、やうやくをなはり、貴人は、衣冠をつけ、履をはくなど、その風、極めて優美なりき。

武家の世となりては、武勇をたふとぶ風俗となりしかば、衣服も、また、之に相應したるもの行はれたり。後、かみしもといふものも出で来て、一般の禮服となれり。

明治の御代となりて、衣冠を、祭服とし、また、西洋の風をも採りて、種々の服制を定められたり。

軍人、警察官等の服制は、專、西洋の風により、裁判官の服制は、我が國古代の風によれり。現今、男子の大禮服には、燕尾服を用ゐる。又、通常の交際には、フロックコート、または、羽織袴を以て、禮服とし、普通の婦人は、白襟、紋附を以て、禮服とするなり。

第十二課 染料

染料には種々ありまして、青色には多く、藍を用おます。藍は、暖で、水氣の多い土地に、よくできる植物で、阿波の國から、多く出ます。又、山靛ヤマアキといふものがありまして、多く、九州の南方にできます。之で染めたものは、度々洗濯しても、色がさめません。薩摩、琉球、上布などは、これで染めたものでございます。

赤色には、紅アカネなどを用お、黄色には、鬱金ウツキン、山梔ナシガリ、安ヤス、黒色には、楨椰子ヒンナシ、五倍子ゴハク、鐵漿テツカスなどを用おます。

この外、萌黄を染めるには、黄と青、紫を染めるには、青と赤とを交へます。か様に配合して、種々の染料を作るのであります。

又、石炭瓦斯を製する時、アニリンといふものがとれます。このアニリンで、鮮麗なる紫

色の染料を製します。之に媒染劑を加へると、さまざまの色ができます。近頃は、また、化學の進歩につれて、種々の染料が發明せられました。

第十三課 池野大雅

池野大雅ハ、書畫ヲ以テ聞エシ人ナリ。若カリシ時、三絃ヲ好ミ、其ノ頃ノ名人安永ケンギョウ檢校トイフ盲人ノ住メル隣ニ、居ヲ占メテ、日々

ニ檢校ガ、三絃ヲ、人ニ教フルヲ聞キテ、心ヲナグサメケリ。

大雅、アル時、檢校ガ家ニ到リテ、コトサラニ、カク、近隣ニ住ミタル故ヲ告ゲテ、一曲ヲヒキテキカセラレンコトヲ請ヘリ。檢校、其ノ志ノ切ナルニ感ジ、ヤガテ、三絃ヲトリ出デテ、彈キテキカセケリ。然ルニ、其ノ三絃、裏皮破レテアリシカバ、大雅、無禮ニハ候ヘドモ、

オノレ一生ノ思出ニ、皮全キニテ、今一曲ヲ  
 ト乞ヒケルニ檢校、快カラザルサマニテ、其  
 許ハ、何ヲ業トシテ、日ヲ送り給フゾト問フ。  
 大雅、答ヘテ、繪ヲカキ候トイヒケレバ、サス  
 レバ、其ノ繪拙カルベシ。見ルニ足ラザルモ  
 ノナラント、心オキナク言ヒ放テリ。

大雅、怪ミテ、其ノ故ヲ問フニ、檢校笑ヒテ、サ  
 レバナリ。今、裏皮ノヤブレタル三絃ヲモテ  
 彈キタルヲ、飽カズ思ハル、由ナレド、ソノ  
 キ、ザマニテ、繪ノ  
 拙サハ知ラル、ナ  
 リ。三絃ハ、右ニ撥ヲ  
 モテバ、右手ニテヒ  
 クコト勿論ナレド、  
 左手ニ、精神ナクシ  
 テハ、到底、妙處ニハ





到ルベカラズ。サルニ、其許ハ、三絃ノヨシア  
シニノミ、心ヲト、バメテ、其ノ餘ニハオモヒ  
到ラヌサマナリ。今、ワガ左手ノ精神、其許ノ  
耳ニ入ラヌヲモテ推スニ、繪モ、マタ、筆ニノ  
ミ、カヲ入レテ、更ニ、左手ニハ、精神ヲコメジ  
ト思フガ故ナリ』トイヒキ。

大雅、イタク、其ノ説ニ感服シ、深ク、恩ヲ謝シ  
テ歸レリ。ソレヨリ後ニハ、常ニ、心ヲ、コ、ニ  
用キテ、繪畫ノ道ヲ究メシカバ、遂ニ、一家ノ  
風ヲ具ヘテ、世ニキコエタル名人トナリケ  
リトゾ。

ハカナキ業ニテモ、妙處ニ達セルモノハ、人  
ノ耳目ノ及バザルトコロニスラ、精神ハ満  
チタリ。物言ハンニモ、文書カンニモ、只、耳目  
ノオヨブ所ヲノミ、限ト心得タランニハ、彼  
ノ安永檢校ニ笑ハレザランコトオボツカ

ナシ。

(北邊隨筆參照)

第十四課 讀書のたのしみ

書を讀み、字を寫すに、明なる窓のもとにて、  
淨き机にむかひ、筆、硯、紙、墨の精良なるを得  
て用ゐるは、一の幸なり。古には、貧しくして、  
燈なく、雪に對し、螢をあつめ、壁をうがちて、  
書を讀みし人すらあるを、今、此の六つの助  
を得て、不自由なく、學問することを得る者

は、時を惜みて、晝はいふまでもなし、夜も、い  
たづらに過すことなく、よく勉むべきこと  
なり。

書を讀まんには、種類を選むべし。空しく、精  
力を費して、多きを貪るは、よみすべきこと  
にあらず。聖賢の書を讀みて、古のことを知  
り、今の理を究めて、平生萬の事を處理する  
に、聊も、さし支ふることなきに至らば、是、大

なる幸なるべし。

又よく歴史を讀むべし。歴史には、國家の盛衰興亡、明君賢相の言行など、一々記せるが故に、之を讀めば、遠き古のありさま、まのあたり、明に見え、我が身、恰、其の世にあへる心地して、數千年の齡をも保てるが如し。此のたのしみも、亦、大なるかな。すべての事、友を得ざればなし得べからず。

只、讀書の一事は、友なくして、ひとり樂むべし。一室の内に居て、天下四海の内を見、天地のことわりを知り、數千年の後にありて、數千年の前を見、今の世に在りて、古の人に對し、我が身おろかにして、聖賢にまじはる。是皆、讀書のたのしみなり。

讀書は、かく、益多く、たのしみ多きに、之を好まざるは、甚しき不幸なり。これを好む人は、

天下の至樂を得たりと謂ふべし。(樂訓參照)

五十二

第十五課 衛生

身體虛弱ならんには、如何に、才智ありとも、事を成すこと難かるべし。されば、常に、衛生に注意して、身體を健にせんことを心がくべし。

運動は、消化の力を盛にし、血のめぐりを善くし、肺を健にす。故に、種々の病にをかざるること少く、筋骨逞しくなりて、精神、常に活潑なるを得べきなり。

清潔を守るも、亦、大切なることなり。常に、垢つかぬ衣服を着、適度に沐浴し、家の内外を掃除し、空氣の流通をよくするは、健康を保つに缺くべからざるなり。

酒と烟草とは、用おざるをよしとす。又、暴飲暴食をせば、身體をそこなひ、病に罹ること

五十三

多かるべし。

人若平素衛生を怠りて、流行病などにかゝることあらんには、一家の難儀は言ふも更なり。近隣にも傳染して、非常の災害を世に及ぼすに至るべし。されば、衛生は、常に己一身の爲のみならず、國家に對する務ともいふべきなり。

文法 起きトイフ動詞ハ、語尾、き、く、くる、くれト

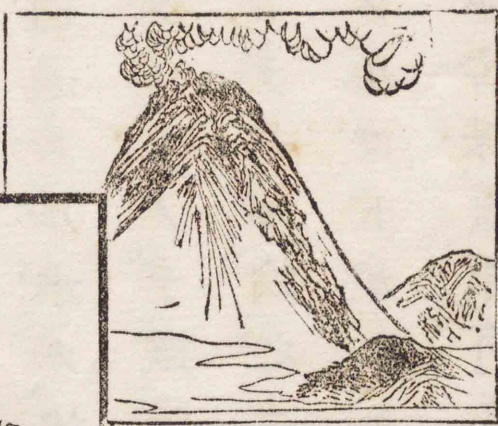
變化シ、忍びハ、び、ぶ、ぶる、ぶれト變化ス。カク、五十音圖ノ、上ノ二段ニ活用スルヲ、上二段活ノ動詞トイフ。

第十六課 温泉

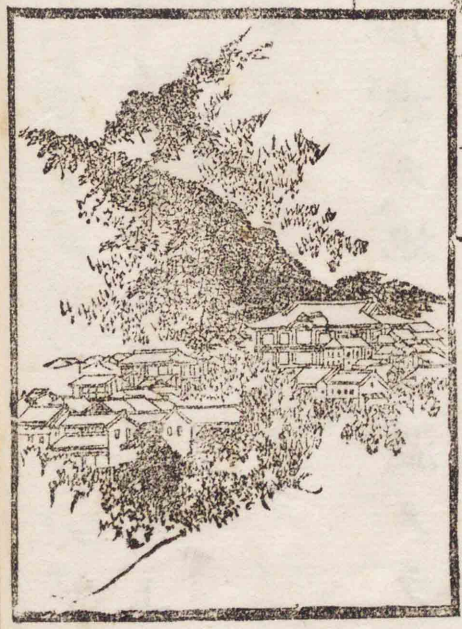
温泉ハ、地中ヲ通過スル水ガ、地熱ニ温メラレテ湧キ出デタルモノデ、鐵、鹽分、硫黄ナドノ礦物質ヲ含ンデキル故、之ニ浴スレバ、身體ノ健康ヲ助ケルコトガデキル。

箱根、熱海、草津、伊香保、鹽原、有馬、道後ナドハ、

有名ノ温泉場  
 デアル。中ニモ、  
 箱根ハ、東京、横  
 濱ニ近ク、山水  
 ノ風景モヨイ  
 ノデ、常ニ、浴客ノ絶  
 間ガナイ。



温泉ノ涌キ出ル近傍



ニハ、必、火山脈ガアル。  
 火山ノ頂カラ、煙ヤ、がすノ如キモノヲフキ  
 ダシテキルサマハ、實ニ壯快デアアル。  
 近頃ハ、交通ノ便ガ開ケテキルカラ、處々ノ  
 温泉ニ遊ンデ、身體ノ保養ヲシ、カタハラ、風  
 景ノ奇抜ナル火山ノ有様ヲ見テ、雄大ノ精  
 神ヲ養フノモ、至極愉快ナコトデアラウ。

第十七課 交通

都をば霞とゞもに立ちしかど

秋風ぞ吹くしらかはの關

こは、昔、能因法師のよみ出でし歌なり。當時は、春霞立つ頃に、京都を出で、秋風の吹く季節ならでは、奥州白河には着くを得ざりしを、今は、交通開けたれば、京都より、汽車に乗らば、凡、一晝夜にして達するを得べし。又、貨物を運び、音信を通ずることも、極めて、

便利となり、其の方法、要具等も、近年、いちじ  
るく進歩せり。

現今、官設鐵道の東海道線は、東京より、京都、大阪を経て、神戸に達し、日本鐵道會社の青森線は、東京を起點として、白河よりも、尚遠き仙臺、青森等に達せり。

此の他、山陽鐵道、九州鐵道、關西鐵道、兩毛鐵道、炭鑛鐵道等あり。又、電信線をば、到る處、蛛

網の如くに架し、海底電線をも設けたれば、  
海外各國とも、自由に通信するを得るに至  
れり。

沿海の各港には、汽船の到らざる處なく、歐  
洲、米國、濠洲等への航路をも開始したれば、  
海上の交通も、日を追ひて、盛大に赴けり。

第十八課 商人の心得

敬次郎ハ、數年ノ商業見習ヲ終ヘ、國元ニ歸

リテ、呉服店ヲ開キ、シニ、舊主人ヨリ、商業上  
ノ事ニツキテ、深切ナル書狀到着セリ。

一筆申入れ候此度、呉服店御開業のよし  
目出たく存じ候。御親も定めて御喜の  
事と存ぜられ候

かねて申述べ候通り、商人としては、金  
錢の出入を慎むこと肝要にて候。ゆるか  
せに致し候は、つひ之多くなりて暮し



辺と相なるべ  
 く候  
 又商機を知る  
 こと肝要に候  
 彼の三井八郎  
 右衛門が幼少  
 の時日本橋通  
 に武士の往来繁きを見て刀の下緒つか

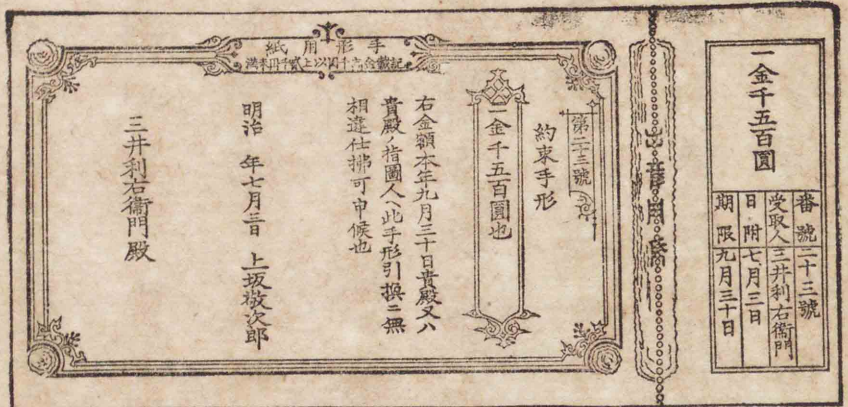


ぶくろなど高ひわづかに三貫文のもと  
 でにて朝より暮まで二貫文の利益を  
 得て主人の賞賛をうけその後江戸に呉  
 服の本店を開き京大坂に支店を置きて  
 傍為替の業を営み自他の便益を圖りし  
 が如きためしも之あることに候  
 すべて商法の秘訣は小を積みて大を致  
 すことにてこれあり候一時の奇利を得

んとすれば却て信用を害して損失を被ることこれあるべく候此邊御如才なく成され候様念じ入り候勿

第十九課 信用

信用ある商人は、取引先より、商品を借るところを得るがゆゑに、少額の資本にても、多額の商賣をするを得べきなり。一々、現金の受渡を要する如くにては、到底、手廣き商業を



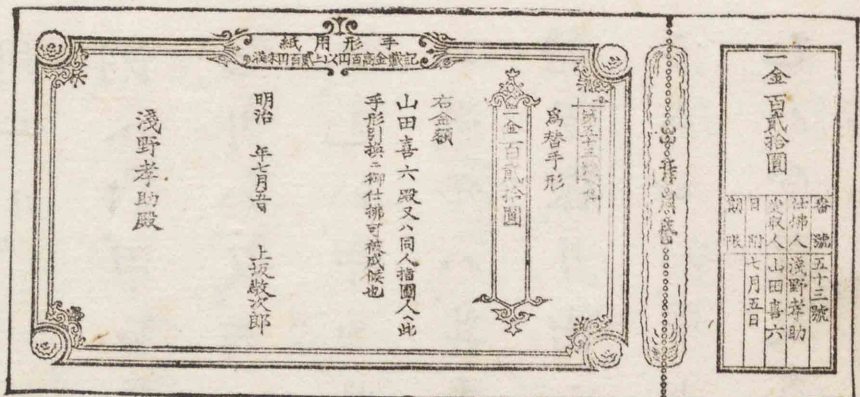
營むこと能はざるべし。信用あれば、約束手形にて、多額の品物を取引し、賣却せし上、期日に至りて、代金を仕拂ふことを得るがゆゑに、巨額の資本なくとも、相當の利益を得べきなり。されば、信用は、一種の資本と

も謂ふを得べし。信用を得んとせば、先約束を誤らざらんことを勉むべく、信義を重んじ、奢侈を戒め、浪費を慎み、律義に、商業を営むを要す。若、之に反せば、得意先にては、自然信用上の取引をせざるに至るべし。心すべき事なり。

第二十課 爲替ノ法

現金授受ノ煩ヲ省カンガ爲ニ、爲替ノ法ヲ用キル。

例へバ、甲ヨリ、乙ニ支拂フベキ金アリテ、乙ヨリハ、又、丙ニ支拂フベキ負債アリトセンニ、乙ハ、甲ヨリ、金子ヲ受ケ取り、更ニ、之ヲ、丙ニ送ルハ、甚、手數ヲ要スレドモ、乙ハ、丙ニ、爲替ヲ振り出シテ、甲ヨリ、其ノ金ヲ受ケ取ラシムレバ、甲ト丙トハ、直ニ、金錢ヲ授受シテ、乙ハ、受取、及支拂ノ手數ヲ省クヲ得ルガゴ



トシ。  
サレバ、爲替ハ、必、三人ノ間ニ  
成立スルモノナリ。ソノ證書  
ヲ作ル者ヲ、振出人トイヒ、金  
額ヲ支拂フベキ者ヲ、支拂人  
トイヒ、證書ヲ所持セル者、即、  
金額ヲ受ケ取ルベキ人ヲ、所  
持人、又ハ、受取人トイフ。

銀行爲替、郵便爲替、電信爲替等ハ、皆爲替ノ  
一種ナリ。此ノ法ニヨルトキハ、遠キ處ニ、金  
錢ヲ送達スルニ、紛失、盜難ノ虞ナクシテ、極  
メテ安全ナリ。

文法 例へ、受けナドハ、語尾へ、ふ、ふる、ふれ、け、く  
くる、くれト活用ス。カク、五十音圖ノ、下ノ  
二段ニ活クヲ、下二段活ノ動詞トイフ。

第二十一課 衣笠城趾

相州の東南なる三浦郡に、衣笠城キスガキの趾あり。

三浦氏の居りし處にして、横須賀軍港を距ること、一里餘なり。其の間、山をきり開きて、路を通じたる處あり。昔、三浦義明が、八十の老體にて、源氏の爲に、敵を防ぎしは、此の邊なるべし。今は、車馳せ、馬走り、何人も、その要害を説かずなりぬ。

城趾は、一段高くして、おながら、四方をのぞむべし。山川の間、尚、昔の名残を留め、かしこ

には、路開けて、樓門の跡、明に、こゝには、斷礎散在して、壘壁のありしこと、まぎれもなし。枯草、茫々として、谷川の音、かすかにひびき、老松立ち并びて、今も、みどりの色の變らぬなど、何となく、昔の忍ばれたり。

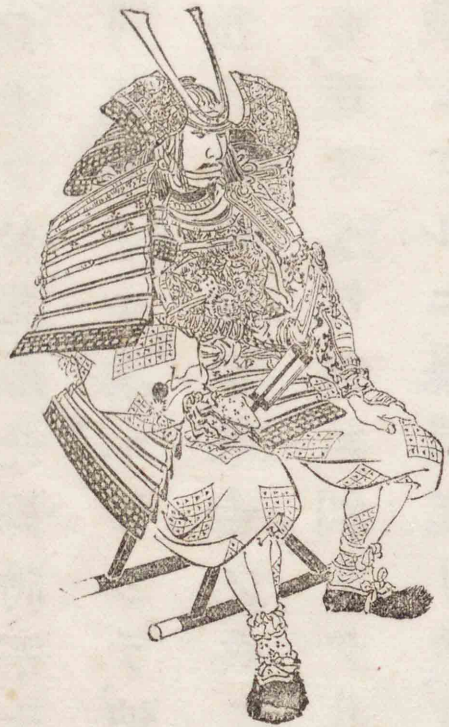
城墟より、數丁にして、小池あり。三浦氏の亡びしとき、一門、悉、身を投じて、失せにきといひ傳ふ。生ひ茂りたる樹木、之を蔽ひて、物す

ござ言はんかたなし。  
 こゝを距ること遠からずして、義明の墓あり。瓦にてたゞめる、古き垣の中に、苔生ひたる古碑、二つ立ちて、永く、義士の名をとゞめたり。

墓のもとに、頼朝の手向の躑躅あり。義明の死後、その志をあはれみ、來り詣で、手づから植ゑしものなりといふ。長く生ひて、數百年來の古木と見ゆ。

第二十二課 元寇(二)

今ヨリ、凡六百年前、蒙古ノ酋長忽必烈クブライ、支那



全國ヲ討チ從へ、  
 餘威ニ乘ジテ、我  
 ガ國ニモ、使ヲ遣  
 シテ、朝貢ヲウナ  
 ガシケリ。

鎌倉ノ執權職北條時宗、大二、其ノ無禮ヲ怒  
 リ、返書ヲモ與ヘズシテ、使ヲ逐ヒカヘセリ。  
 後、六年ヲ經テ、蒙古ノ兵三萬、壹岐、對馬ヲ犯  
 シ、進ミテ、筑前ニ到リケリ。少貳景資等、防ギ  
 戰ヒケルニ、暴風起リテ、敵船、多ククツガヘ  
 リケレバ、敵ハ、夜ニ乘ジテ、遁ゲ去レリ。  
 其ノ後、蒙古ハ、國號ヲ、元ト改メ、再、使ヲ遣シ  
 テ、朝貢ヲ促シケレバ、時宗、使者ヲ斬リ、復來  
 レルヲモ、捕ヘテ斬リ捨テタリ。

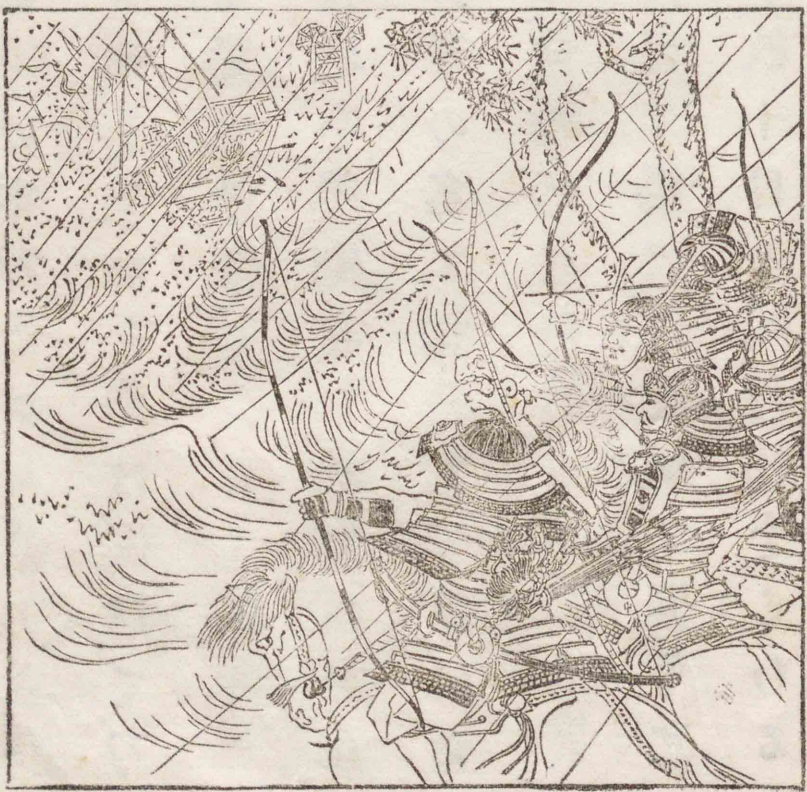
第二十三課 元寇(三)

忽必烈、大二怒リ、一舉ニ、我が國ヲ滅サント  
 テ、弘安四年七月、蒙古、支那、朝鮮ノ兵、十萬餘  
 ヲ、數千艘ノフネニ載セ、范文虎等ヲ將トシ  
 テ、我が筑前ニ攻メ寄セヌ。  
 忠勇無雙ノ我が兵、イカデカ、之ニ屈スベキ。  
 河野六郎通有等、小舟ニ乘リテ、群ル敵艦ノ

間二分ケ入り、櫓ヲ仆シテ、梯トシ、敵艦ニ乗  
リウツリテ奮戦シ、終ニ、其ノ一將ヲトリコ  
ニセリ。

續キテ、安達次郎、大友藏人等ノ勇士、競ヒ進  
ミテ戦ヘバ、敵ハ、船ヲモ寄セアヘズ、退キテ  
鷹嶋ノ沖ニ船ガ、リシテアリケルニ、一夜、  
海上、風暴レ、浪サカマキテ、敵艦、悉覆リ、溺レ  
死スルモノ、數ヲ知ラズ。我ガ兵、機ニ乗ジ、オ

ソヒ撃チテ、之  
ヲツクシ、只、三  
人ヲ殘シテ還  
ラシメタリ。忽  
必烈聞キテ、大  
ニ恐レ、マタ、我  
ガ邊ヲウカ、  
ハザリキ。





第二十四課 日本刀

我が國は古より武を尚びしかば、從ひて、刀  
劍を鍛ふる術も盛なりき。

朝廷にても、また、之を獎勵せさせ給ひけれ  
ば、吉光、正宗、義弘等の名工、相續ぎて、世にあ  
らはれ、鍛鍊の法、愈、精巧に赴けり。

刀劍を鍛ふるには、工場に、注連繩ツルナを張りて、  
不淨を近づけず、數十日の間、丹精をこむる  
なり。

されば、銳利なる事、比すべきものなく、能く、  
外國の刀劍をも兩斷するに足り、名聲、世界  
に高し。

北條時宗は、之を用ゐて、蒙古十萬の大軍を  
みまごるしにし、豊臣秀吉は、これを用ゐて、  
明韓の兵をきりなびけたりき。

げに、武勇なる日本人の氣象は、凝りて、銳利

なる日本刀となり、銳利なる日本刀は、勇武なる日本人に用おられ、相待ちて、國威をか  
がやかせるものと謂ふべし。

文法

射見ナドイフ動詞ハ、い、いる、いれ、み、みる

みれナドトナル。カク、五十音圖中、上ノ一

段ニテ活クヲ、上一段活ノ動詞トイフ。

第二十五課 みるにのみもり

孝明天皇御製

雨におもひ風にこゝろをくだくかな

民のしわざのたゞやすかれと

山はさけ海はあせなん世なりとも

きみにふた心われあらめやも

兼實朝

虎ほゆる國のさかひもものゝふの

まもるかざりは安けかりけり

永野吉蓮

高等小學國語讀本三卷

明明明明明明明明明明  
 治治治治治治治治治治  
 三三三三三三三三三三  
 十十十十十十十十十十  
 四四四四三三三三二二  
 年年年年年年年年年年  
 八九三三十一一十一  
 二二二二二二二二二二  
 月月月月月月月月月月  
 八五廿二十十四一五一  
 四十五二  
 日日日日日日日日日日  
 修修修修修修訂訂發印  
 正正正正正正正正  
 五五四四三三再再  
 版版版版版版版版  
 發印發印發印發印  
 行刷行刷行刷行刷行刷



編者 發行所 代表者 印刷者

價 定	
全八冊	金壹圓七拾錢
卷ノ一金貳拾錢	卷ノ五金貳拾貳錢
卷ノ二金貳拾錢	卷ノ六金貳拾貳錢
卷ノ三金貳拾錢	卷ノ七金貳拾貳錢
卷ノ四金貳拾錢	卷ノ八金貳拾貳錢

西澤之助  
 東京市二橋一區番築地  
 會社  
 橋本忠次郎  
 東京市二橋一區番築地  
 河本龜之助  
 東京市二橋一區番築地  
 佃隆造

(高等小學國語讀本與附)

